

キブツの生活(3)

——はじめて耳にする人のためのキブツの紹介——

シュロモー・タミール

百瀬 直彦(訳)



■文化と催しもの

レジャータイム

キブツのメンバーは余暇時間をいろんなことに使う。まず労働を終えるとシャワーを浴び、労働着から普段着に着換え、お茶がコーヒを飲む。八時間の労働の終るのは午後四時か五時であり、小さな子供を持つ両親は子供の家に連れにゆき、少し大きな子供たちは自分で両親の家に来る。子供の勉強をみてやることの外に、彼らも新聞や本を読み、手紙を書き、ラジオやプレーヤーでレコードを聞く。(個人的に貯金して買ったものをのぞいてキブツにはステレオはまだ普及してはいない。)

夕食時になると共同食堂で夕食をとる。小さな子供を持つ親は夕食前に子供を寝かしつけにゆく。夜には一週間に一度くらいは映画会がある。そして週一度メンバーの総会がある。ほかにメンバーは種々の委員会、組織に関与してなかなかいそがしい。講演会、パーティー、勉強会などもあるし、他の人が部屋に遊びに来ることもあるし、また行くこともある。

子供たちも両親との時間、子供会の活動とやっぱりいそがしい。両親が学習を手伝ってやれない(移民してきたばかりで語学が確かでない場合など)とか、特別に教育しなければならぬ子供の場合には、特別な世話する人がついて学習が進められる。何人かの子供は自分の部屋で、あるいは両親の部屋で楽器の練習をする。その子供たちは週一日か二日町の楽器教室所、あるいはいくつかのキブツが共同で招く講師について楽器演奏を習うのである。その成果をキ

ブツメンバーのためにひろうしたり、いくつかのグループと合同して地域音楽会を開いたりする。子供たちの間にも自主的に計画される演劇、スポーツ、趣味のサークルがある。

土曜(安息日)と祭日

シャバトはキブツにとっても特別の意味をもつ。この日は金曜日の日没から土曜日の日没まで続き、正統のユダヤ教徒はこの日一切の労働をしない。バスもストップする。商店も開いていない。まったくの安息と、次の週への身心ともに準備の日なのである。キブツの食堂では食卓に白いテーブルクロスが掛けられ、メンバーは普段の日よりおしゃれする。男は白いシャツを着け、女はスカートを着用する。食事の前にはブドウ酒が出て、特別な肉料理とスープが出る。

キブツによってはシャバトの儀式がもよおされるところもある。ローソクの灯がともされ、聖書の一部が朗読され、祈りの一節がとなえられる。食後にはなにかの催しものがあるところが多い。

ベサツハ(すぎこしの祭)、その前におこなわれるオメル祭、スーコットの水の祭、新年、独立記念日などの特別の祭日もキブツで祝われる。夕方から夜にかけてキブツの中の人たちはもちろん、親類など外部に住む者も一堂に会して食事し、特別の儀式とそれにつづくパーティーをもよおす。子供が十三才になり成人したことを祝うバル・ミツヴァや、子供の卒業式、キブツの創立記念日も大きなお祭りのひとつである。それぞれの祭日には子供達独自のパーティーも開かれ、多くのおとなたちがそれに参列する。

キブツメンバーの結婚式もキブツ全体の祝いごとのひとつであり、

役所での登録を終えたカップルが親戚はじめキブツ中のひとびとに囲まれて祝福を受ける。

シャバトと祭日には野外の畑仕事は行なわれないのが原則である。しかし欠かせない仕事——動物関係の仕事、食堂関係、子供の家族関係——の仕事はおこなわれなければならない。そこでいくつかのキブツは、休祭日の仕事に対して週の中の一休みを与え、あるいは一ヶ月に一日くらいの割合で、全メンバーが休祭日の仕事につくことを義務づけている。特に野外仕事のいそがしい収穫時などには、休祭日でも全メンバーから志願者を募って決められた仕事を済ましてしまうことがあり、余程都合の悪い者でないかぎりこの呼びかけ(ギユース)に応じる。

キブツの宗教

キブツ運動を形造っているキブツの中に、宗教的に正統的ユダヤ教の戒律——安息日、食事など——を厳守するひとびとが集まっている宗教キブツが十数ヶ所がある。そこでは子弟の教育もキブツの信仰に従って特別なカリキュラムに従っておこなわれる。普通の特に宗教キブツでないキブツでもメンバーなりその両親なりに宗教的傾向を持つひとが居る場合、キブツの中に会堂があることがある。食事に関する戒律を守るひとのために台所でそのことを考慮し、そのひとは特別食を作るようになっていく。

キブツで完全に守られている宗教的戒律は結婚に際しての儀式と子供が生まれてから男子のみにほどこされる割礼であろう。前者は宗教局の管かつであり、それ以外で行なわれる結婚ではユダヤ人として認められない。



多くのキブツでは公式的な戒律のじゅん守はこの二つの基本的要素のみにとどまっている。しかし聖書のことばに示される社会的正義、人間関係の原則はキブツメンバーの心に深く植えつけられていて、日々の生活にそのあかしを見ることが容易である。例えば「汝の父母を敬え」ということはキブツの中でこそ現実的に守られていると主張できる。すなわち老年になっても捨てられることもなく、子供も自力で老父母を養わねばならない義務もない。だから金銭づくでない真の肉親愛にのっとりた人間関係が可能だと我われは考えている。その他例をあげたらきりがなが、理想としてただとなえていたこと、守ろうと努力しても守れなかったことが、キブツでは現実的に守れる下地ができていくということである。

■必需品の供給

キブツメンバーの基本的な要求を満たすためのキブツの経済的 effort のほかに、さまざまな小さなもの——タバコ、酒、菓子、歯みがき、歯ブラシ、爪切り、トイレトペーパー、せっけん、ひげそり、茶、コーヒーなど——を売るかあるいは配給するなんでも屋がある。多くのキブツではメンバーは各人千円から千五〇〇円前後の小遣いとそのキブツ内だけで交換価値を持つチケットを支給され、それで

好みのものを買っている。
あるキブツでは服、靴、家具などのためにまとまった金額をメンバーに渡し、好みと金額に従ってキブツ外で買わせるところもある。他には、決まった金額を平等に与えるのでなく、必要などころにキブツ側で買って与えるキブツもある。

しかしすべてのキブツにおいて、食堂での食事、子供の養育費一切、健康管理、服飾、家具、不具者のための出費、病気の際の出費などはすべてキブツの予算によって保証されている。キブツ内の手工業で作ることのできる靴、服などはキブツ内のショップに注文にゆき、好みのものを作ってもらうこともある。そうでない場合でもキブツでは工場に直接、大量に注文するので、個人で買うよりはるかに安く手に入れて配給することができる。

服の洗濯はすべて共同洗濯場で行なわれる。汚れた服、靴下、下着、シーツ、枕カバーなどをメンバーは決められた所に投げこんでおく。洗濯場ではそれらを洗濯し、アイロン室に回し、そこで更にほころんでいるもの、ボタンのとれているものは修理され、個人ごとの箱に入れられて返ってくる。もちろん、あらゆるものに自分のナンバーをぬいつけておくか、消えないもので記しておくかする必要がある。

一般に農業を営む村の生活は簡素で、泥くさいものである。しかし我われはそれだけのことで、文化的な生活、快適な、豊かな生活を捨てる積りはしない。自分の好みに合った服装をし、快適な家に住み、電気製品を楽しみたいのである。それも財政的に徐々に可能になりつつある。その意味で、キブツでも近ごろ女性には髪形の講習会、美容講座、美容食などに関心を示し、更に優雅な生活に進みつつある。

と同時にキブツ内では女性に安産のための体操・知識の普及に努めている。中老年人的の体力維持のための体操教室もある。

■梓を拡げること

キブツは閉鎖的にならぬように常に新しいメンバーを喜んで迎える制度を確立してきた。その梓をもっと押し拡げるためにキブツは国内や海外からの青少年参加や街の家族、移民家族のキブツへの参加に重大な関心を払っている。現在のキブツの扶養能力はあと何万人という新規加入者を支えるに充分であるとみなされている。そのうえ、未開拓のネゲヴ、ガリラヤ地方に入殖するのに、多くのグループが必要とされている。

発展の源泉

最も重要なのはキブツ内の発展である。結局子供が育って、結婚し、子供をもうけるという自然増である。次に青少年移民、他の町や村からの移住、海外からの移民家族、国内の学生によって組織されるワークキャンプからの参加、ナハル（開拓軍団——イスラエル国軍に属し、危険地域の防衛と開拓にあたる）などによる社会増である。キブツ運動は、ワークキャンプ運動やナハルに指導者、助言者を与えるなどして、多方面からの参加を呼びかけ、援助している。そしてしばしばこれらに参加したものの中からキブツへの参加者が現われたり、グループとして経済的に未発展のキブツに入って援助することがある。ワークキャンプやナハルの若者たちはキブツで組織的に訓練を受け、キブツの子供たちとも親しむ。彼等がキブツの生活に魅力を感じれば彼らは気に入ったキブツに参加するとか、自



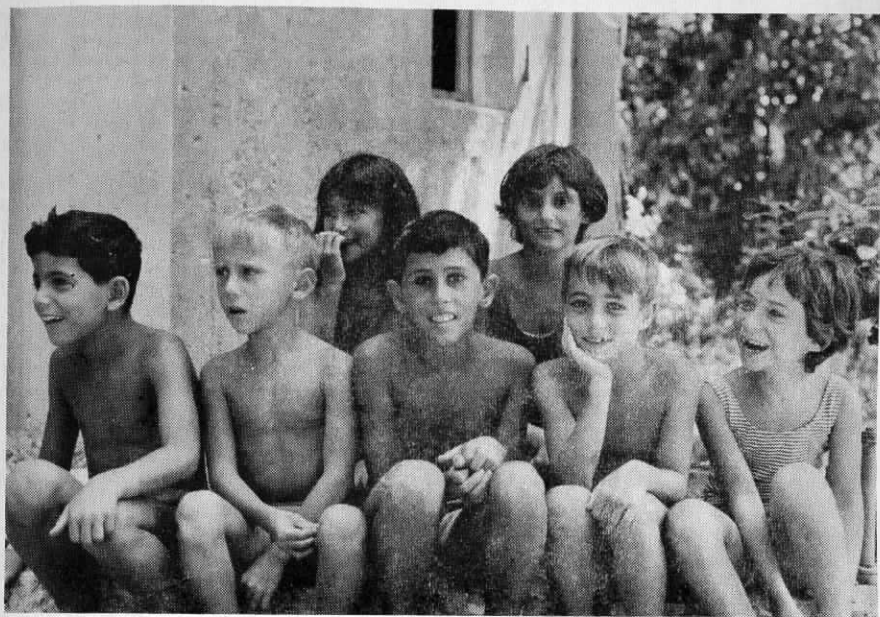
分達の仲間を核として新しいキブツを造ることになる。

キブツの発展に欠かせないのは今まで述べてきたキブツの人口増加という側面とキブツが地域的な、また国家的なレベルで横のつながりを強化してゆく側面とがある。この二つの側面はたがいにおきないあつて完全な運動を構成する。

地域的には文化的、経済的相互扶助が極めて一般化している。近隣の、あるいは思想を同じくするキブツ間で共同の展示会、音楽会、演芸会を開くことはしばしばある。また、ひとつのキブツでは持てないほどに高価な施設——教員養成所、農産物マーケット、農産物加工所、飼料製造所、集乳加工場、などはキブツ間で協力して維持している。国家的レベルにおいてもヒスタドルト（労働総連合）の組織にキブツは極めて積極的に取り組んで、イスラエルの労働問題一般の解決に尽力しており、一般労働者の待遇改善に役に立ったことは計り知れない。

政治活動においてもキブツは活発に動く。支持する政党はキブツにより異なるが、それぞれがよしと思う方向に強力にキブツとして、またヒスタドルト、キブツ連合を通じて働きかける。国民の四パーセント弱のキブツメンバー人口がイスラエル政治に及ぼす影響は不相応に大きなものがある。

もっと大きなスケールで言うと、全世界のユダヤ人に働きかけてもいる。特にアメリカや西欧のユダヤ人社会とはユダヤ国民基金、他の援助を通じ、またワークキャンプを組織することによってつながっている。毎年世界各国から夏の間ユダヤ人非ユダヤ人を問わずキブツに夏期ワークキャンプが組織されて、多くの若者がキブツの生活になじみを深くしている。



行政

キブツでは毎年執行部を選出する。五人〜七人なる執行部と、一五人〜二十一人なる委員会、それに総会からなっている。それらの委員会役員（書記長、総務、労働委員長、購買委員長、經理委員長、他）は毎年改選されるか、二年続けて選ばれることもある。が、専門的に管理的、経営的職務につくことはない。最近では比較的若いメンバーがこれらの職に選出され、第一世代から第二世代への交代現象を示している。キブツメンバーのうち少なくとも三分の一の人は、なんらかの形で委員会の活動的、行政的、文化的な面に関わっている。

個人的な問題

どこの世界でもみられることがやはりキブツでもみられる。つまり居心地悪いと感ずる人びとである。仕事に喜びを感じない人、共同食堂での食事が気に入らない人、個人的な問題に悩まされる人、子供の知恵おくれに悩む人などである。家族が対立分裂した例、夫婦が死別あるいは離婚する例も多い。キブツはそれらの問題のアフターケアに全力を尽くすことはできるが、それらの人に代わって問題を解決してやることはできない。

キブツ中の人が仲よく、何のいさかきもなく朗らかであるわけではない。誤解もあれば噂話もあるし、痴情話もある。あるいはキブツ側の責任者達とどこに衝突する場合もある。ある人はまったく部屋に閉じこもり、他人を訪ねもせず、訪問者もない。結婚できなかった男女、子供のない夫婦、伴侶の探せない若者たち……と数

えあげれば、どこにもある小悲劇がキブツにもある。

キブツ外の方が自分に満足のゆく生活ができると思う人はキブツを去る。しかしキブツに再び帰ってくる人の方が多い。子供がみなキブツを出てしまつて、老夫婦だけ残つてしまつた例もないではない。一方には孫、ひ孫に囲まれたおだやかな老年、他方には老夫婦だけのわびしい老年、といった対照も成立する。社会組織の変革によつてこれらの悲劇をなくすことは不可能かもしれないが、少なくとも、それにもかかわらず望むならばキブツで生活をつづけられ、新たな価値にめざめることのできる状態にしておいてやるのが、キブツにできる限界であり、個人ならざる集団——社会——のできるすべてであらう。

おわりに

以上述べてきたことは、キブツの理論や判定ではなく、キブツの中のごくつまらない毎日の生活である。読者の中には、なあんだ、キブツと言っても別に理想的でもなんでもありやしない。普通の人間が普通に暮らしている単なる小さな村にすぎないではないか、というひともあらう。そう言つて欲しかったのである。実は偉大なことなどなにひとつない。理論は実践のあとから付け加えられたものであり、追い込まれた状態に陥つて、我われ平凡人が知恵と身体を働かして考へついたものにすぎない。

ただこのようなキブツが、そもそも歴史のはじまりから動かずにそこにあつたと誤解してもらいたくない。三十年前のキブツは今のものとくらべたら赤面するほどに小げな、原始的なものだった。ほつ立って小屋に、蛇や蚊と闘いながら、一部屋に体臭ムンムンする

若者が、泥のように眠りこけている図も想像してほしい。はじめて
する激しい太陽の下肉体労働に手足のまめから血を流し、あるいは
腹痛をうったえ、死んでいったいくらかの友人を思い起こして
ほしい。しかし、なんとといっても、かれらも平凡な、生き残った者
よりもっと弱い人間にすぎなかった事実もあわせ考えてみるこ
と。

なにか実際にするとき、理論的な批判や、提言をできるだけ受け
入れたいと思う。しかしなんにしても時間が無い。作物は待つて
は呉れない。たとえそれらの提言のちになって真理と判明するに
したところで、判明させたのは実際にそれを行なった人びとであつ
て、それを唱え、一年後には忘れ去った人びとのメリットにする
わけにはゆかない。

キブツは実験の上に実験を重ねて、今のようになつて成った。これ
からも変わるであらうし、変わらねばならない。世界全体がそうなつ
た時には消えてしまうこと、忘れられ、過去の遺物として、批難、
抹殺されることこそ本望である。実験の仮設はただひとつ。我われ
には仲間がいる、信頼できる仲間がいる、たとえけんか別れしよ
うと、常に我われのそばをはなれず、批判の手をゆるめずに自分たち
にアンチテーゼとして立つことのできる仲間たちがいる、というこ
とだった。

忘れられた人びとは忘れられるべくして忘れられた。それらの忘
れられた無名の人びとのために私の心は豊かである。

付記

キブツ協会では毎年一、二回グループでのキブツ研修生を募集し
ています。十五人二十人が一グループとなつて、あるひとつのキ
ブツに半年間、一年間滞在して、ヘブライ語を学び、レクチャーを
受け、毎日のキブツでの労働に参加します。詳しいことは当協会の
出版物または口頭でおたずねください。

テルアビブ事件以後、個人でキブツに入ることは難かしくなるこ
とが予想されますが、これまでの例では、キブツ連合と直接交渉す
ることによってキブツを紹介してもらい、単独で行くことも可能で
した。今後の事態の発展によって、単独の研修希望者に対してどの
ような取り扱いがなされるかは不明ですが、一応そうした方法もあ
ることを記しておきます。その都度おたずね下さい。

主要なキブツ連合の連絡先も英語で記しておきますので、キブツ
を紹介してもらう際にはそこに自己紹介の手紙を出し、いつごろイ
スラエルに着くか、どのくらい滞在するか、も明記して、返信用国
際クーポン二、三枚も忘れずに同封して下さい。

■Ihud Hakibbutzim Vehakevutzot

—10, Dvornov St, Tel Aviv, Israel

■Hakibbutz Hameuhad

—27, Sutin St, Tel Aviv, Israel

■Hakibbutz Hartzel Hashomer Hatzair

—13, Leonardo da Vinci St, Tel Aviv, Israel

キブツ研修生は安全か

日本協同体協会 常任理事
手塚信吉

今回のキブツ研修生募集について、各方面
からキブツは安全か、と云う問合わせが大分
ありますので、紙上でお答えします。

中東紛争はイスラエル独立戦争以来続いて
おりますが、同国に発達した理想社会キブツ
を憶がれて、世界各国から年々何千人という
青年男女が研修や視察の為、集まっており、
日本からも毎年数十名の青年男女をキブツ研
修生として当協会が御世話しておりますが、
それは純粹の文化交流であつて政治性は全々
ありませんので、何んの危険も事故もあつた
ことがありません。

偶々五月末日テルアビブ空港乱射事件が三
人の日本青年の犠牲であつたので、研修生の
家族の方も、心配されましたが、キブツ側で
は狂人青年とキブツ研修生とを混同しており
ませんから、反つて同情の声が起るぐらいで
何んの心配もありませんでした。そして毎日
明朗で平和な研修日課を果しております。

さてイスラエル国には沢山のアラブ人が住

んでおります。私は一九六二年以来二回イス

ラエルを訪れ、各地のキブツやモシャブを
視察研究した関係もあつて、アラブ人地区に
も入り、アラブ人経営のホテルに宿泊したり、
食堂に立寄つたり、アラブ青年の運転するタ
クシーを努めて利用し占領地域にも案内され
家庭生活までみせて貰いましたが、何処に行
つても誰に会つても日本人と判ると急に親愛
感を深めてくるので好感がもてました。そし
てイスラエル側の日本人に対する親近感はず
た格別でした。殊に智識人の多いキブツ社会
では、教育程度の高い日本人への理解が早く
僅か六カ月間の研修生活が日本青年男女の一
生の懐しい思い出となつております。

中東紛争のアラブ対イスラエルの因果関係
を何れの側からみても理があり、こんな紛争
の種を残した大国の罪の深さを痛感するもの
であります。世界平和の為にも国連の仲介に
より和解の糸口を発見し、一日も早くアラブ
難民の根本的な救済策を実現するよう、心か

ら念願するものであります。

吾々の任務は、日本農業や中小企業者の新
しい活路として、キブツ協同体社会の在り方
が絶好の参考となると思い、青年男女の共鳴
者を選考の上、合格者をイスラエルにキブツ
研修生として送つておるのであつて、若しキ
ブツがアラブ各国にあれば、そのアラブに教
えを乞うであらう。

日本はこれから隣邦中国とも、北朝鮮とも
南北ベトナムとも、大いに交友親善の道を開
く必要があります。キブツは資本主義国イス
ラエルに発達した協同体社会であるが、その
平等、無差別、搾取なき社会形態として、中
国の人民公社を理解する上に、最適の参考資
料である。従つて吾々のキブツ研修は純然た
る文化交流の範囲内であつて、政治性は無い。
そして研修期間六ヶ月半日働いて半日勉学す
るが、労働就業ではない。キブツ社会の慣習
に従つて寝食を共にするが無償無料である。

新しい農村指導者の雑誌

地上

B5判 ● 定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役職員、農業経営者は

全員読もう

正確な情報／正しい分析による

重点特集

● 3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

制作部メモ

▼研修生事務を一手に引きうけたのと、9月号の制作責任で、めったやたらといそがしい。よくみると、スズメだって、野良猫だって、ゴキブリだって、けっこういそがしがっている。動きまわっている方が自然で、ねむる以外に、じっと瞑想にふけらねば健康が保てないようだったら、ばくの方がどこかでずれているともいえる。反面、「人間」だったら仕方ないのか？ せめてゴキブリのような活動力をそなえたい。

る人たち——ばくの目には、彼らが宇宙的な生命共同体の中にゆったりと身を委ねて、深い安堵感を持っているようにみえたのだ。今でもインドというところ、心が騒ぐ。

ガンジーからばくらが学ぶものは無限にある。とりわけ、この競争社会の中で対立葛藤する人間のありよう以外には人間の現実はないのだときめつけるのではなく、人間が真の自己に目ざめて他者と新しい関係をつくってゆく可能性を信じるうえに、彼の生き方は力強い支柱になる。

テツ

■直接購読（入会）のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者（キブツ会会員）によって支えられています。1年間（12号）の会費は入会金（200円）とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京＝新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
京都＝京都書院 札幌＝富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台＝八重洲書房 盛岡＝第一書房 福岡＝九大生協 名古屋＝おぼた文庫 富山＝清明堂 松本＝遠兵ブックセンタ
■印刷所＝創土社 東京都港区芝5-16-13
電話 452-0501・6069

「月刊キブツ」 1972年8月号（通巻101号）

頒価 150円 送料16円（1年間2,000円）
東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイッ10号 日本協同体協会
電話 370-2813 振替・東京 24403

を交互にみながら、いつえさに飛びつこうかとその機をうかがっている彼ら。この住人は、おまえたちを焼鳥になんかしなから安心して食べにおいでと、どうやって知らせよう。このスモッグの空の下でさえ、だれにも頼らずに一人で生きている、とてもいった感じをすずめから受け、ふっと心を打たれる何か

九士

▼毎月、整理するおびたしい数の「会費ぎれ」の購読者カード。会費納入願いの手紙を書いていると、受け手のないキヤッチボールをしているような、心もとなさため息が残ります。でも、このところ神戸読書会が発足したり、私達のささやかな活動に呼応して下さる人達の存在は何よりの支援です。恭子